

# ロールシャッハ・テストと知覚の哲学

鈴木 千 晴

(立命館大学大学院総合心理学部／特任助教)

本研究は、インクのシミを見立てる投影法の心理検査であるロールシャッハ・テストと、知覚の哲学で取り上げられてきた錯視や両義図形、オブジェクト認知やパレイドリアなど、あいまいさを含む知覚現象との共通点や違いを整理し、知覚の本性についての心理学的、哲学的議論と関連づけて論じた。

本研究で取り上げた知覚現象から、推論などの心的機能と知覚との関係についてロールシャッハの視点でも問題が提起された。知覚の哲学では、外界と正しく対応する真正な知覚が典型的な事態として想定されてきた一方、心理学やロールシャッハ・テストの文脈では、知覚にとってあいまいさは根本的なものであることが示唆された。また知覚現象としてのロールシャッハ・テストに特徴的な点として、能動的な知覚的探索において体験される受動性や、知覚の個人差における公共性、現象的性質の記述といった点が挙げられた。本研究は探索的な試みであり、これらの論点について今後さらに検討する必要がある。

キーワード：ロールシャッハ・テスト、知覚の哲学、インクプロット・テスト、投影法  
立命館人間科学研究, No.48, 63-80, 2024.

## 1 はじめに

ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）は、インクのシミを何らかの対象に見立てる心理検査である。この「見立て」は錯視や両義図形などあいまいさを含む知覚現象と共通点をもつ一方、ロ・テストに特有のユニークな側面をも有する現象である。錯視や両義図形のようなあいまいさを含む知覚現象は、知覚の本性や意識について取り扱う知覚の哲学において、知覚や意識の特定の側面を反映する現象として取り上げられることがある（例えば源河, 2017）。しかしながら他の知覚現象のように、知覚の本性についての議論と関連づけてロ・テストを論じた知見は管見の限り未だない。そこで本研究では、知覚の哲学で取り上げられる種々の知覚的現象

とロ・テストとの共通点や相違点を紹介しつつ、知覚の本性についての心理学的、哲学的議論とロ・テストを関連づけることで問題提起を試みたい。本研究の試みは非常に探索的であり、特に哲学的な議論への言及は不十分にならざるを得ないと考えられるが、ロ・テストのようなあいまいな刺激に対する知覚現象に含まれる、異なる学問領域を越境して検討されるべき興味深い特性を指摘することを狙いとするものである。

以下では、まずロ・テストの概要と歴史的経緯や研究動向についてまとめ、ロ・テストと類似する知覚現象の共通点や相違点を整理した後、認知的・神経的モデルとの関わりについて触れ、今後の展望をまとめる。

## 2 ロ・テストとは

ロールシャッハ・テストとは、左右対称なインクのシミ、すなわちインクプロットを印刷した10枚の図版に対して「何に見えるか」を被検査者に問いかける投影法の心理検査である(Rorschach, 1921; Exner, 1974; 片口, 1987)。左右対称のインクのシミ（インクプロット）とは、インクを落とした紙を二つ折りにしたもので、図1はこれを模して筆者が作成したものである。ロ・テストは投影法の代表的な心理検査として、少なくとも2000年には中心的な心理アセスメントの地位にあったが、時代遅れのものとして批判を受けてもきた（丹野, 2000）。ロ・テストは現在も、心理臨床家の教育課程で広く教育されている一方で、実証に基づく臨床心理学の流れの中で、臨床現場での使用頻度の減少も指摘されている（加藤, 2019）。

### 2.1 手順と概要

ロ・テストは基本的に、検査者が干渉せずプロットを自由に見立てる自由反応段階と、その後10枚の図版を順にもう一周見ながら、前段階の反応について、どこに、どのような要因で、何が見えたのか、誘導的にならないように検査者によ



図1 筆者による模擬インクプロット

る質疑が行われる質問段階の二つに分かれる(Rorschach, 1921; Exner, 1974; 片口, 1987)。そして、それぞれの段階で得られた言語・非言語的反応に基づいて、検査者によって分類と集計が行われ、解釈がなされる。方法論にもよるが、ロ・テストに付される分類には主要な3種類と、その他のものがある。すなわち、反応が生じたインクプロット上の場所（反応領域）、反応を生じさせたインクプロットの性質（反応決定因）、何を見たのか（反応内容）と反応の性質に応じて付されるその他の指標である。

### 2.2 歴史的経緯

Hermann Rorschach が没した際、ロ・テストはまだ十分に理論化が行われておらず、10枚の図版と基本的なアイデアが提示されたのみであった(Exner, 1974)。なお、Rorschach自身はこれを心理検査としてではなく、精神障害をもつ人やそうでない人に対する知覚の実験ととらえていた(Rorschach, 1921)。Rorschachの没後、その図版や構想をもとに、異なる方向性を有する実施・集計法、解釈法が形作られたが、Exner, J.E. が各流派のスコアリングを実証的データによって取捨選択・統一した「包括システム」を打ち出したことで、司法や臨床心理支援の現場で広く用いられるようになった(Exner, 1974)。しかし、Wood et al. (2003) は、Exnerの方法の心理測定論的な欠点や、心理検査としての構造的欠陥を広く指摘し、司法的な判断の材料や医学的診断に用いられるべきではないと主張した。ロ・テストの心理検査としての妥当性についての議論は、その後も引き続き行われており、欠点を改善したRPAS (Meyer et al., 2011) などの新しい実施法が模索されている。

Wood et al. (2003) の批判は、反応数が統制されていないために他の数的指標が反応数によって大きく変わってしまうという、いわゆるR問題や、評定者間一致率の問題などテストと

しての構造に関する問題だけでなく、ロ・テストの取り扱いに関する臨床心理学的価値観にも及んでいた。Exner 以前からのロールシャッハ・カルチャーは、ロ・テストには数量化の埒外である特別な要素があるため、本来臨床経験に基づいて個性記述的にアプローチされるべきだという価値観を含んでおり、科学的検証が十分なされないような文化的風土を形成しているというのである。確かに様々な小説や映画の中に登場するロ・テストを見ると、日常的用法においてロ・テストという語には秘密めいた、魔術的なイメージが伴っていないとは言えない（例えば Moore & Gibbons, 1995 石川・秋友・沖・海法訳 2014）。このような文化的背景も、ロ・テストの知覚や認知に焦点を当てた基礎心理学的アプローチが不十分であることの要因だと考えられる。

Exner (1974) はロ・テストが他の検査と異なり、臨床経験に裏付けられた全体論的判断が求められることを強調しており、また片口(1987)もロ・テストが様々なパーソナリティを広く捉えることができる点で他と異なる秀でたテストであるとした。これらの記述は、ロ・テストは解釈の過程にも、そこから分かることにも他にない特徴があるのだと印象付けるもののように思われる。しかし、ロ・テストは特別な刺激に対して起こる、知覚一般と連続性のない独特な現象であり、特殊な訓練を積まなくては読み解けない、と閉鎖的に捉えるのではなく、心理学的枠組みや知覚の哲学といった領域への越境が試みられることで、あいまいさを含む知覚現象としてのロ・テストの興味深い側面への、多面的な検討が可能となるのではないか。

## 2.3 研究動向

近年ロ・テスト中の神経活動を調べることを通じて、その反応生成に関わる神経的基盤を明らかにしようとするアプローチが盛んに行われ、

ロ・テスト中に賦活した脳領域から、視覚処理、発話、想起、意思決定（斎藤ら, 2018）や、注意制御（Vitolo et al., 2021）、注意による特徴統合（Giromini et al., 2017）などが関与すると推測されている。中にはロ・テスト反応の生成メカニズムにまで言及しようとする研究（Giromini et al., 2017）もあるが、ロ・テストとその他の知覚課題との知覚・認知的処理の異同が心理学的枠組みで十分に説明されていないなど、未だこの問題が十分明らかになったとは言えない。

ロ・テストの生成メカニズムについて、Exner (1974) は、第一に図版のコード化と分類が行われ、第二に図版が再スキャンされて精緻化が起こり、不要な反応が破棄された後、第三に適切な反応が選択され発話されるという三段階のモデルを提示した。これを踏まえて Acklin & Wu-Holt (1996) は、反応生成を視覚的短期記憶が長期記憶と照合されるプロセスとして説明した。そして石橋・斎藤 (2021) はこの Acklin らの各プロセスを、関連する脳領域と対応させている。確かに記憶との照合は不可欠だが、知覚、記憶の想起、発話を含む他の認知課題とは微視的にどのような違いがあるのか、十分比較されていない。例えば Rorschach, H. は、ロ・テスト反応を記憶の物理的痕跡を表すエングラムという語を用いて説明していたように（Rorschach, 1921）、ロ・テストの術語や反応生成メカニズムのモデルには、心理学的な知覚・認知の用語や概念と連続性が低いものもある。

ロ・テストの心理検査としての妥当性をめぐる問題には未だ議論がある（小西, 2021）。投影法自体を疑問視する指摘がある（丹野, 2000）一方、ロ・テストに習熟することは、臨床心理学的支援の現場における質問ややりとりの技術を磨き、支援する上で有用な仮説を構築するのに役立つため、支援者の教育に有用だとする指摘（中島, 2002）もある。

本研究では心理検査としての妥当性という論

点をはなれ、知覚・認知一般と連続性をもつ心理学的な現象としてのロ・テストの性質について取り上げる。このような捉え方は検査としての実用に資するアプローチとは異なるが、ロ・テストと共通性のある知覚的現象を手がかりに、知覚の哲学の知見を援用することで心理学的・哲学的基礎づけを行うことには意義があると考ええる。

### 3 ロ・テストと類似するあいまい知覚現象

知覚現象としてのロ・テストでは、インクブロットというあいまいな刺激に対して個人差のある多様な知覚が生起する。以下では、ロ・テストとその他あいまいさのある知覚現象との共通点や相違点を検討し、知覚の哲学においてそれらの取り上げられる文脈を概観する。

#### 3.1 オブジェクト知覚と図地分離

ロ・テストのように、一見するとインクの汚れのような無意味な刺激に対して有意義な知覚が立ち上がる現象の有名な事例としてGregory (1970) のダルマチア犬の図がある(図2)。ある図に、一見するとわからない別の事物が描き込まれているものを隠し絵というが、この図もはじめ無意味な斑点にしか見えなかった絵の中

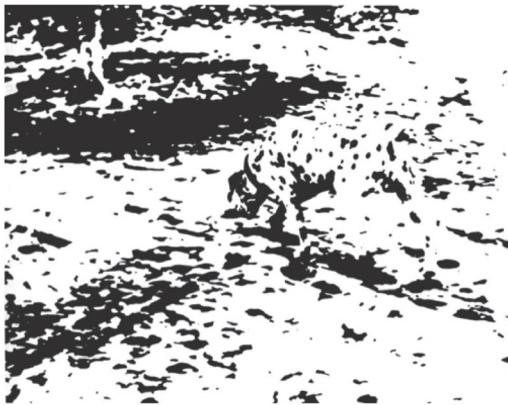


図2 the Dalmatian dog (Gregory, 1970)

に、まだら模様の犬がいることに気づくものである。一度見えるようになれば簡単に見つけることができ、逆に言えば見えない状態には戻ることができないことから、無意味な刺激の中に有意義な対象を見出す働きの頑強さが伺える。ロ・テストも一見インクのシミにしか見えないような中に動物や人間、その他様々な対象が見られる(Rorschach, 1921; Exner, 1974; 片口, 1987)。ダルマチア犬の図では、あいまいな背景から犬という対象が切り出され、背景(地)と対象(図)の区分が起こる。図地分離が起こり、なおかつそれが反転する例としてルビンの杯(図4c)が有名だが、ロ・テストでもインクブロットの白く穴の空いた部分が地の一部としても図としても知覚されるということが起こる。

ダルマチア犬の図は、オブジェクト認知の例として捉えることができる。オブジェクト認知とは、身の周りの物体を視野の中から分節・選択して、既知のものとして認めることである(新美・上田・横澤, 2018)。新美ら(2018)によれば、オブジェクト認知は当たり前のことのように思われているが、複数の部分から成るようなオブジェクトを、他のものに遮蔽されていても知覚的に補完して図地分離できたり、多様な見た目の物体を、多様な角度や条件下で、同じカテゴリーのオブジェクトであると認めることができたりするように、単純な受動的カテゴリー判別で説明できない複雑な現象である。例えばマグカップであれば、一部が隠れていても、また多面的に観察しなくとも一方向から見ればそれと分かり、みたことのない形のマグカップであってもマグカップだと分かるのである。

オブジェクト認知では視覚的特徴群からボトムアップ的にオブジェクトの表象が抽出され、視覚的記憶表象と照合されるが、このときどのようなものがオブジェクトとして機能するかという「オブジェクト性(objecthood)」が問題となる(新美ら, 2018)。新美ら(2018)はこの問



題が、注意が背景からオブジェクトを分節する単位や、「そのものらしさ・本質」の表象を含む、作業記憶の中の情報の単位に関わっているとしている。後者は、同じオブジェクトに対する様々な方向からの視覚像の集まりや、目的・文脈に応じて異なる抽象度で照合される視覚的情報のような、オブジェクトを名指す情報の集合を指す（新美ら、2018）。このような情報のまとまりは、知覚の哲学における種性質（kind property）の概念とも関連づけられるだろう。種性質は、リングがリングだと分かるときの言わば「リング性」であり、リングの知覚経験に固有に含まれるような現象的性格を指す（源河、2017）。種性質も、どのような性質があるものの認識を成立させるのかという、ダルマチア犬やロ・テストにおいて重要な問題に関わっている。本研究では、あるオブジェクトの効率的な認識に必要なとなる、そのオブジェクトらしさを示すような情報の集まりを仮に「そのもの性」と呼ぶ。「そのもの性」の表象に関連する概念は他に、現象学の文脈にもある。

まず Edmund Husserl (1913 渡辺訳 1979) は、立体物を見る際に全ての面が一度に見えるわけではなく、様々な角度からの見えが次々に経験されることを指摘し、このことを射映（Abschattung）と呼んだ。そして射映の経験が無数に重ねられることで、一つの角度からの見えである射映的現出から、決して同時には経験されることのない裏側のような、別の見えが潜在的に経験されるようになり、このことを予料（Antizipation）という（Husserl, 1893 立松訳 1974）。この予料は、様々な角度の経験の集積による情報のまとまりを仮定している点で、前述のオブジェクト認知における表象の姿と共通する。他にも Husserl, E. (1913 渡辺訳 1979) は、絵や写真の中にここにはないものを知覚するように、印刷された紙や画布を通じて別のものが知覚されることについて、例えば画布に塗られた絵の具を像物体（Bild Ding）、絵

の中に見える姿を像客体（Bildobjekt）、実際の風景そのものを像主題（Bildsujet）と呼び、像物体の知覚を通じて像客体が、実在はしないがあたかも存在するかのように意識されることを中立性変容（Neutralitätsmodifikation）として定義した。田口（2015）は Husserl, E. の概念を用いて画像の知覚経験を分析し、このとき意識的に経験される対象が能動的構成でなく受動的経験から成立すると指摘している。知覚における受動性という観点は後述のように、ロ・テストにも深く関連する。

他にも Maurice Merleau-Ponty は、私たちが肉体を離れてものを見ることができないために、外界は常に不完全な形で徐々に認識される他ないことを指摘し、このような遠近法的展望、ないしパースペクティブ性を知覚にとって根源的なものとして重視した（村上、2014）。この性質のために私たちは一点からの視野しか持ち得ず、身体運動によって見えない側面が見えるようになる。Merleau-Ponty, M. はこのように、ある感覚をもつということが、世界を取り扱うための行動の型を所有することであるとしており、それはすなわち、行動によって対象の表れはどう変化するか、すべての知覚的展開のうちに現下の経験はどう位置付けられるかという関係性の総体を所有することであるとした。そしてそのような一般性・普遍性のある経験の総体を、Merleau-Ponty, M. はフィルムの断片にたとえてモンタージュと呼んでいる（西口、2022）。Husserl, E. と Merleau-Ponty, M. の方法は現象学と呼ばれる哲学的立場であり、現象学は、世界を理解する人間の能力の本性を取り扱うために身体や知覚を重視する（Käufer, & Chemero 2015）。予料やモンタージュは、ともに知覚的経験の総体がひとまとまりのものとして表象されていることを示唆している。

経験のまとまりとしての表象に関連した概念として、Ruth Millikan の局地的反復自然記号が

ある（戸田山，2014）。Millikan, R. は、あるものが別の何かを志向する表象の働きについて生物学的定義を試みている。Millikan, R. によれば、生物が感覚を通じて身の周りの世界から有意義な情報を得るためには、ある表象がどのくらいの確率で有用な結果を伴うかについての繰り返された経験が必要である。局地的反復自然記号とは、そのような反復された経験によって獲得される記号（ある情報によって別の何かを志向するような表象）である。Husserl, E. や Merleau-Ponty, M. は経験が繰り返されることに着目したが、Millikan, R. はこれに加え、確率ないし統計の頻度という観点を導入している。

「そのものの性」は経験の集まりや繰り返しに依拠するのだとすれば、見た経験のないものにもオブジェクト認知が起こる点をどのように考えることができるだろうか。関連する概念として、Ludwig Wittgenstein による家族的類似性 (Familienähnlichkeit) が挙げられる (Wittgenstein, 1953 鬼界訳 2020)。Wittgenstein, L. によれば、カテゴリに固有の本質や一般的定義は存在せず、実際には部分的に重なり合うゆるやかな特徴の連関、すなわち家族的類似性があるのだとされる (古田, 2020)。オブジェクトにも家族的類似性に想定されるような、類似性の複雑な網目があると考えられる。またオブジェクトには容易に認識できる典型的な見えと認識が容易ではな

い見えとがあるとされるが (新美ら, 2016)、モニターや予料、反復自然記号と考え合わせると、経験の集合にも何らかの重みづけがあり、「そのものの性」を高い確率で示唆する特徴群が新奇オブジェクトの同定にも重要であるのかもしれない。

以上をまとめると、無意味な刺激の中に有意義な対象が見え、その対象の「そのものの性」が知覚されることには、経験の集積によって形成された表象や、特徴の連関についての知識が関わりと考えられる。このことは記憶と知覚との相互作用を意味するが、これは知覚の哲学において知覚の独立性というかたちで問題となる。この点については 3.3 で後述する。

### 3.2 パレイドリアと錯視

ロ・テストに共通性をもつ他の現象としてパレイドリアがある。パレイドリアとは、ノイズのような不定形の対象が誤って違ったものに見えることであり、精神医学的には幻視と錯視は峻別されるべきではあるが、レビー小体型認知症 (DLB) にはパレイドリアと幻視の両方が特異的に頻発する特徴があるとされる (池田, 2020; 横井・西尾・内山, 2012)。横井ら (2012) は DLB を鑑別するため、斑点ノイズ画像の中に刺激を隠すことで、パレイドリアを人為的に引き起こすテスト (図 3) を作成し、レビー小体

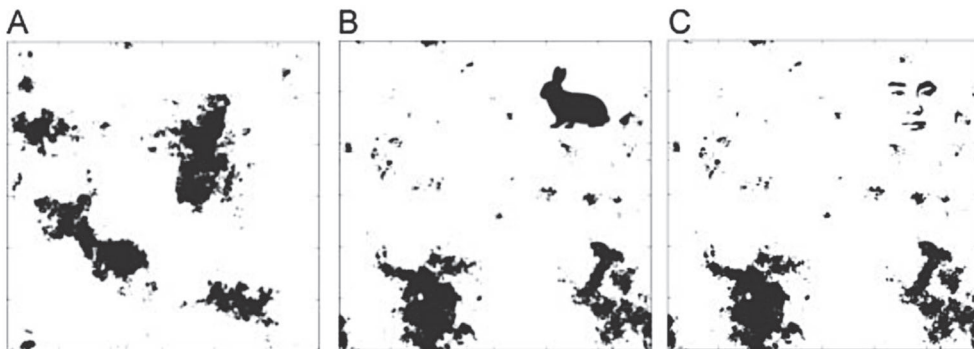


図3 ノイズパレイドリアテスト (Yokoi et al., 2014)

型認知症患者でパレイドリアが有意に多く起こることを明らかにした（Yokoi et al., 2014）。不在の対象を視覚的に知覚することが幻視であり、刺激の性質が誤って知覚されることが錯視であるとすれば、幻視を特有の症状とする DLB にパレイドリアが有意に頻発することは、錯視と幻視とは何らかの共通項が存在することを示唆する。この点について横井ら（2012）は、幻視には視覚経路と注意障害の双方が関与しており、通常は感覚情報の入力から無意識に挙げたオブジェクトの候補のいずれかに注意が向いて知覚が起こるのに対し、幻視では誤った視覚表象への注意の結びつきが起これ、幻視と同様のこのような機序でパレイドリアが促進されると指摘した。ロ・テストが横井ら（2012）のテストと同じようなパレイドリアの人工的誘引だとすれば、健常者から精神障害を有する人まで様々な性質の人に対し同じ刺激を提示した際のパレイドリアの内容や頻度などについて蓄積されたデータともとらえられる。

ロ・テストは錯視の一種と考えることができるだろうか。また、幻視との関係についてロ・テストが示唆することはあるのだろうか。錯視について北岡（2014）は、知覚というのは多くの場合歪んでいるために、錯視はその内包的定義であるところの「対象の真の性質とは異なる視知覚」というだけでは定義できないことを指摘し、外延的定義から、誰にでも容易に見えて驚きがあり、美しいといった性質を挙げている。錯視に特別な内包的定義がないとすれば、ロ・テストやパレイドリアも特別で例外的な現象ではなく、日常の知覚と連続性のあるものと言える。

片口（1987）は、ロ・テスト反応が現実感や逼迫感をもったものか想像の遊びやゆとりがあるのかを示す測度として、体験的距離という概念を提唱し、反応内容とプロットの形態などの特徴との間の合理的なつながりである認知的距

離と対置した。すなわち、同じ「オオカミ」を見るのでも、実在しないとわかっていて見るのか、今にも飛びかかってくるかのように恐怖を露わにするのかでは後者の方が内容と距離をとれていないと解釈できるため、体験的距離を喪失した反応といえるだろう。錯視と幻視にまたがる性質を有するパレイドリアと、ロ・テスト反応とは、体験的距離の喪失が起こりうるという点で連続性を持つものと考えられる。加えて興味深いのが、インクプロットに対して「インクのシミでしかありません。その他のものに見ることはできません」というのは、体験的距離が極大化した反応であって、体験的距離を喪失した反応と同じく適切で健康な反応とは言えないとされる点（片口, 1987）である。インクのシミをインクのシミである、というのは事実を述べた正しい知覚であるにも関わらず、典型的でない逸脱した反応だとされるのである。すなわち健常者の知覚においては、無意味な刺激を正しく無意味と知覚するのでなく、そこに有意義な対象が誤って、なおかつ程々の現実感を伴って知覚されることがもっとも平均的なのである。このような性質は、前述した Husserl, E. の、存在しないがあたかも存在するような「像客体」の在り方にも共通する。

以上のように、パレイドリアやロ・テストは、錯視と幻視にまたがるような要素を持っているが、その二つはこれまで峻別されてきた。特に知覚の哲学においては、事象を「正確に」知覚する真正な知覚と錯視や幻覚の区別が錯覚論法ないし幻覚論法と呼ばれ、大きな問題となる。

錯覚・幻覚論法ではまず、知覚は外界の事象との対応によって成功の度合いに違いがあることが前提となり、外界の事象を正確に反映する知覚が真正な知覚だとされる。そして外界の事物の性質と知覚された性質が異なる場合は錯覚、外界に対象が存在しない場合それは幻覚となる。例えば、赤くて丸いリンゴが知覚されるとき、

外界に確かに赤いリングがあるなら真正な知覚、実際には青いリングや平面のリングがあるなら錯覚、リングが存在しないなら幻覚となる (Fish, 2010 山田監訳 2014)。その三つの事態で知覚の体験に差がないとすれば、体験のみを手がかりにそれらは区別できない。そうだとすれば、それらの体験に共通する要素がある (共通要素原理) はずであり、またその体験を引き起こす原因が実在するはず (現象原理) である。そして、知覚された赤いリングは赤いリングそれ自体について何かを表象しており、誤る可能性をもつ (表象原理)。これらが全て正しいとすれば、外界は直接知覚されているのではなく、三つの事態で共通して存在する内的な赤いリング、すなわちセンスデータを通して間接的に知覚されるはずである (Fish, 2010 山田監訳 2014)。これが錯覚・幻覚論法によって裏付けられたセンスデータ説であるが、センスデータ説は、主体と外界とを完全に隔ててしまうことになるために、これに代わるべく、知覚の志向説や選言説といった説が提出されている (小草, 2009)。

ロ・テストやパレイドリアのようなあいまいな知覚は錯視的な要素もあるが、日常的な「真正な知覚」と全く非連続的な現象ではない。一度見えたダルメシアンが消えないように、発見されたオブジェクトが再びおぼろげになるようなことは起こり得ないが、それは逆に言えば有

意味なオブジェクトを探し出し認識しようとする働きが強いために、無意味な刺激の中の有意義な対象の知覚がフォールスアラームとして起こる事態だともいえる。知覚における在と不在にはこのように連続性があり、この点で本質的にあいまいさがあるといえる。そして在という実感の有無もまた連続的である。在るように見えたからと言って必ずしも確からしい現実感強く伴われるわけではないし、落ちているポリ袋が猫に見えるように「真正な」知覚でなくとも現実感を強く伴うことは、幻覚症状のない健常者にもある。ロ・テストやパレイドリアといった錯視に類するものと「真正な知覚」の連続性や、知覚一般のもつあいまい性の問題には、知覚と、推論のような他の心的機能との関係性も関連すると考えられるが、この点については次節で述べる。

### 3.3 両義図形における知覚の反転

両義図形とは、刺激は不変であるのにも関わらず、主観的に複数の知覚が存在し、それらの知覚間でひとりでに切り替えが起こるような図である (図4)。例えばいわゆるウサギ・アヒル図 (図4a) のように、異なるオブジェクト認知が起こるものや、ネッカーの立方体 (図4b) のように奥行き解釈の切り替えが起こるもの、二重十字 (図4d) のように白い十字と黒い十字の

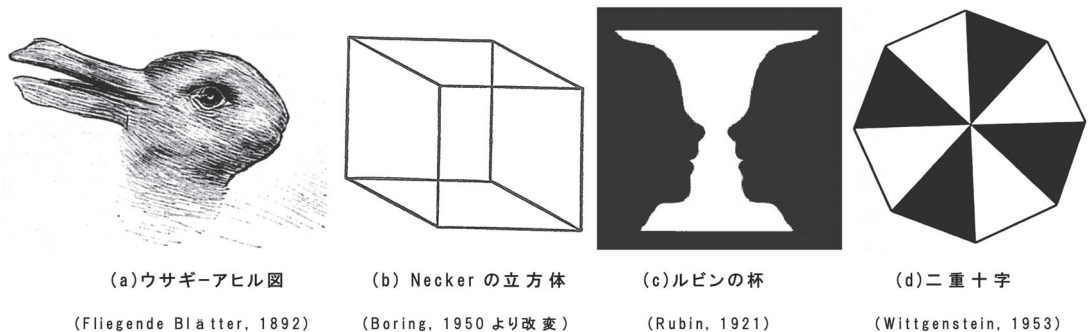


図4 両義図形



ような、刺激のまとまり方であるゲシュタルトが複数通りあるものなどがある。山田(2015)は、両義図形の反転をアスペクトのひらめきとして定義した Wittgenstein, L. の知見を手がかりに、両義図形を概念が介在するものと非概念的なものに分け、このことを通じて、表象が概念的 content を持つか否かについて議論している。ロ・テストは、同じインクプロットに対して通常複数の見えが起り、それらの間を被検査者は少し努力すれば自由に行き来することができる点で、両義図形のうちではウサギ・アヒル図に近い。

両義図形は、推論のようなより高次の心的機能と知覚との関係性、すなわち観察の理論負荷性や、知覚への認知の侵入（不）可能性を論じる際に錯視（例えばミュラー・リヤー錯視、図5）と併せてよく例示される（源河，2017）。ウサギ・アヒル図はウサギやアヒルが見えなかったとしても、指摘されれば両方見ることができるようになるため、経験や信念に知覚が影響を受けている例だと言える。他方、ミュラー・リヤー錯視はたとえ直線の長さが実は同じであると教えてもらったとしても、依然として異なる長さに見えるために、信念や経験が知覚に影響し得ない例である。このような、信念・経験など知覚以外の要素が知覚経験に影響を受け得るのかについての議論を認知的侵入可能性（cognitive penetrability）という（源河，2017）。

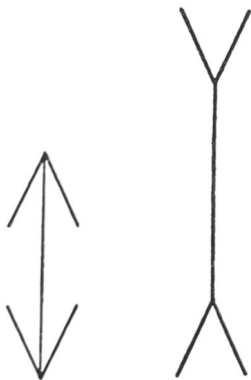


図5 ミュラー・リヤー錯視（Boring, 1950）

知覚の哲学の文脈では、信念や経験と、知覚との関係は認識論的意味合いをもつとされる（源河，2017）。認識論は私たちが世界について有する知識の本性に関する議論であり、例えば知識が確実に正しいものであるためには、その拠り所となる知覚経験は疑いや誤りの可能性が排除された正しいものである必要がある。加えて知覚経験が正しいものであるためには、信念や経験といった、外界から独立である要素によって影響されてはならないことになる。このように、正しい知識とそのよりどころを重視する立場を基礎づけ主義といい（源河，2017; 小草，2009）、この立場は認知的侵入可能性を支持しないことになる。このような認識論的動機づけから、錯覚・幻覚論法においても外界と「正しく」対応する「真正な」知覚こそが知識を正当化する典型的事態として位置付けられるのである。

仮に知覚経験が認知的に侵入可能であるとすれば、同じ外的条件のもと二つの主体が同じ刺激に異なる内容の視覚経験をもつことが可能だということになる（原田，2018）。これには、知覚が情報遮断性を有するモジュールであるか否かが関わっており、解決には今後実験的知見の蓄積が待たれるとされる（信原，2017）。例えば Hansen et al. (2006) は、画面上のバナナの色を灰色に見えるよう調整する課題において、バナナは黄色いという先入見が働くことで灰色をより青く調整することを報告しており、知覚の認知的侵入不可能性は必ずしも頑健ではないことが示唆される。

関連する別の議論として、知覚内容の許容範囲についてのものがある（源河，2017）。これは、知覚内容のうち、非知覚的な心的操作（推論や解釈）が介在せずに知覚可能なものとしてどのような内容が許容しうるかを問題とする。色や形といった性質には問題なく知覚可能性が認められるが、前述した種性質や美的性質など、複雑な処理を要するような内容になるにつれ知覚

可能性を認めるのが困難になる。源河(2017)は、色や形などの基本的性質がゲシュタルト的まとまりをなすような特定の「仕方」で知覚されるとき、高次性質にも知覚可能性を認めることができるとする、高次モード知覚説を唱えている。

知覚可能性のうち、特にロ・テストに関係するのは種性質についての問題だと思われる。種性質は、あるオブジェクトを名指す性質であると同時に、偽物や別のものにはない、正しく当のものを示すような性質をも含意し、後者の論点では例えば偽物のリンゴを本物のリンゴと誤認する場合、リンゴの種性質は知覚されているか否かといったことが問題となる(源河, 2017)。しかしロ・テストに関連するのは前者の側面であり、前述した「そのもの性」についてのものだろう。源河(2017)は種性質も低次の知覚的性質に還元できないゲシュタルトであるとしているが、前述のように「そのもの性」が特徴のまとまりや経験の集積に依拠するとすれば、これをゲシュタルトとして捉えるのは妥当だと考えられる。

また種知覚に関連して、新たな種知覚が獲得される際に、知覚の現象的性格も変化し、したがって種性質は解釈や推論を介さず知覚経験に反映されるのだという Susanna Siegel の議論がある(源河, 2017)。Siegel, S.によれば、木に関する知識が少ないときの木に対する知覚の現象的性格と、知識を得てその木が松であることがわかって知覚した際の現象的性格には違いがあるという。つまり、松の種性質が知覚され、知覚経験の現象的性格に反映されたために知覚経験の内容が変化したと考えるのである。

知覚の侵入(不)可能性や許容内容の議論を踏まえると、ロ・テストで起こっていることは知覚であると言えるのだろうか。ロ・テストにおいては、同じインクプロットを用いるが、人によって全く異なる知覚が起こる。問題なのは

この反応の違いを引き起こす何らかの個人差が、知覚の範疇にあるのか否かだということになる。例えばどのような特徴に注意をむけやすいかという特性は、前述のウサギ・アヒル図でいえばウサギとアヒルのどちらが先に見えるかといったことに影響する。しかし Siegel, S.の松の見え方が、注意の向け方の違いによって説明できることから、体験される現象的性質の違いは知覚の範疇ではないという指摘もある(Logue, 2013)。

Rorschach (1921)は当初から、被検査者はロ・テストを想像力や記憶の想起の課題だと思ふことが多いのに対して、その内実は知覚の個人差を調べる課題であると考えていた。ロ・テストの反応には、記憶や態度、選好が直接表現される場合もあるが、その知覚体験に伴う現象的性質に由来するものもある。例えば同じ場所に「子犬」という反応があったとしても、跳ね回る子犬、ハスキー犬の子犬、毛足の長い子犬、何かはわからないが犬のような四つ足の動物、といったように人によって異なる内容をもつ様々な知覚が表現される。知覚体験に伴う現象的性質の個人差の問題は、同じ木を「木」と見るか「松」や「アカマツ」と見るかによって現象的性質が異なるとした Siegel, S.の指摘や、オブジェクトの表象における概念の抽象度の問題とも重なるかもしれない。

ロ・テスト反応には知覚としての面もあるが、推論とも連続性をもつと考えられる。例えば「とがった帽子をかぶっているからこの人は魔法使いで、手に持っているからこの長いものは魔法の杖だと思う」というのは推論が強く関与した反応だと考えられるが、「この感じはどうしても炎に見えてしまう」といったような反応は推論を介さずに知覚が起こっていると考えた方が自然なのではないか。ロ・テストにおける知覚と高次の心的機能との関係について考える上で、知覚の受動性や体験的距離という点はひとつの

手がかりとなる。受動性というのは、ロ・テストは被検査者に課題として取り組まれており、能動的に「何か」が探索されているはずなのに、多くの場合反応は「突然見える」ものとして受動的に体験されるということである。このとき体験される受動性は、相対的に基礎的で無意図的なボトムアップ処理に伴うものであり、それが能動的行為を上書きし、拮抗するように働くのではないかと考えられ、同様のメカニズムは両義知覚の反転においても想定されている (Pitts et al., 2008)。このことは飛躍すれば、知覚には能動的な操作の外にある要素があり、そのために根本的に受動性なものとして体験されるのだ、と解釈することもできる。例えばこの点に関して木村 (2012) は、自己が自己であるということは他なるものを通じてしか確認されず、知覚はそれが最も端的に起こる現象だと指摘している。他方体験の距離に関しても、被検査者から「～にしか見えない」「どうしても～に見えてしまう」というような反応がしばしば得られる。反応に伴う現実感の程度は、能動的な推論を介さずに受動的に知覚されたものの方が大きいとも考えられる。いずれにせよ、ロ・テストに関して知覚の侵入（不）可能性や許容内容と関連づけて整理すべき要素は多い。

この点に関して、両義図形に関する別の知見を結びつけて考えることもできる。前述のように Wittgenstein, L. は、両義図形に対して複数の知覚が反転することを、目の前の人を見ているうちに知っている人だと気づいたり、兄弟だと聞かされた2人の顔に確かに似たところを見つつけたりすることと同じ、アスペクト（相貌）への気づきとして定義し、知覚している低次の性質は一定のはずなのに、現象的性質が変化することで、はっと何かを発見したように思われる事象に着目した (山田, 2015; 古田, 2020)。

Wittgenstein, L. は、「何かを知る、理解する」ということが、アスペクトへの気づきに似た、

何かが劇的につかみとられる一瞬の出来事だと考えられていることに懐疑的な立場をとる (古田, 2020)。例えば「0 から2 ずつ数を加える」という規則を理解して知る、ということは2 ずつ加えられた無限の数列を一瞬のうちに把握するというではない上、この規則の知識は1000 の次に3 や4 ではなく、確かに2 が足し続けられることをアプリアリに保証するものではない。その知識は、あくまで具体的に2 が足し続けられた正しい無数の事例のうちにしか裏付けられない。これは規則のパラドクスと呼ばれるものだが、ここにおいて「知っている」というのは単なる信念ではなく、信念が正当化されることまでを含意する (古田, 2020)。知覚も同様に、一瞬で対象が把握されるまでだけでなく、それが行為によって裏付けられるプロセスまでを含むとすれば、推論や錯視・幻覚との関係も違ったふうと考えられるのではないだろうか。

例えば、外界と正しく対応する情報を一瞬で看取する「真正な」知覚が知覚の典型なのではなく、James Jerome Gibson や Merleau-Ponty, M. の言うように (Käuffer & Chemero, 2015)、知覚にはその中に修正され裏付けられていく過程が内包されるならば、静的な一瞬の視覚像が外界と「正しく」対応していなくても、それのみによって「真正」か否かは言明できないことになる。このような能動的プロセスとしての知覚はアクティブ・ビジョンとよばれる (長滝, 2008)。

心理学的文脈では、基礎づけ主義の主張に反して、知覚は裏付けを要さないような種類の情報を原理的に提供できないとされる (新美ら, 2016)。例えば二次元の視覚像は、一時点のデータから「正しい」一意の三次元像を決定できない不良設定問題である。Hermann von Helmholtz は、知覚が原理的に推論としての性質を備えると指摘したとされ、知覚のこのような側面は無意識的推論と呼ばれている (Boring, 1950; 柿崎 1987)。源

河 (2017) は、知覚的推論は低次のものに限られるため、知覚の許容内容と分けて取り扱えるとしているが、心理学的知覚観では、知覚として許容できる内容が低次か高次かという人工的区分によらず、不完全な入力情報が無意識的推論によって補われているという側面は知覚にとって根本的なものと考えられる。北岡 (2014) も前述のように、知覚は大抵歪んでいるために、歪みの有無で錯視か否かを区分できないとしているが、この歪みは、知覚が常に不完全な感覚情報を加工しているということに関わっていると考えられる。

錯視において歪みを引き起こす機序は、錯視でのみ働いているわけではなく、適応的な行動のために備わった機能であり、錯視はそれが可視化される条件の発見だとされる (松田, 1995; 小原, 2022)。このような心理学的錯視観は、錯視・幻覚論法において「真正な知覚」を典型的な事態として錯視と峻別する見方よりも、知覚の不完全さを前提する現象学的な知覚観に近い。例えば Merleau-Ponty, M. は、知覚のパースペクティブ性に関連して、このように知覚によって歪められた世界が人間にとっては根源的な第一のものであり、参照されるべき「客観的な外界の物理的情報」のほうがむしろ二次的なものではないか、としている (鷲田, 1998)。

上記をまとめると、知覚がある一時点で含む内容は根源的に、それのみで正誤が決定できないような不完全な情報であり、その後の能動的探索のプロセスやそこで得られた情報を含み込んだものである以上、知覚は推論的にならざるを得ないと考えられる。さらにこのような探索行動やそこから得られる解釈としての知覚には予料やモンタージュ、局地的反復自然記号のようなそれまでの知覚経験が不可分に組み込まれるのだとすれば、個人差が生ずることは避けられない。同じ外的条件のもと同じ刺激に二つの主体が異なる内容の視覚経験をもつことを認め

る認知的侵入可能性の定義 (原田, 2018) に従えば、不完全さを含む動的な過程としての知覚は、ロ・テスト反応のように必然的に個人差を伴うために、認知的に侵入可能なのだということになるだろう。このとき生ずる個人差は、小さくなる場合がありこそすれ、決してなくなることはないを考える。

ロ・テストは、他の投影法の心理検査と同じように、あいまい刺激への対処の中に日常場面の行動様式や価値観などの心的性質が反映されることを想定している (Rorschach, 1921; Exner, 1974; 片口, 1987)。つまりロ・テストでは、不確定さをもつ日常場面とあいまいな知覚的刺激が連続的で同型的なものと仮定されるために、それらに対する解釈としての知覚の性質は、知覚以上の広範な心的性質の個人差を反映すると考えるのである。知覚一般があいまいさを含み、より高次の心的プロセスと相互に影響しあうために、ロ・テストが日常場面を含む広範な個人差を可視化するのだとすれば、ここで可視化されるものは知覚においてどのように位置付けされうるのか。

ロ・テストがあいまいさを含む他の知覚的現象と大きく違う点の一つに、個人差を切り分け、病理性を判断する要素として公共性を導入することが挙げられる。公共性とはロ・テストの様々な方法論に共通する概念であり、どれだけ多くの人に「見える」反応か、すなわち反応の出現頻度を基準として、その知覚や判断の健康さを判断するというものである (片口, 1987)。反応の出現頻度が問題となるのは、ロ・テストにおいて「真正な」知覚が原理的に生じ得ないためであり、出現頻度の高い反応は他者に了解可能で適切な反応で、頻度の低い反応の中には他者に了解できないような、非合理的な知覚や判断が含まれる場合があるのだとされる (片口, 1987)。例えば、3人に1人以上の頻度で同じプロットの同じ領域に生じた、同じ内容の反応を



平凡反応と呼び、平均的で健康な観念や認識能力の指標として用いる（Rorschach, 1921; Exner, 1974; 片口, 1987）。

病理的とされる反応の一つの要素として、インクプロットの形態と概念とを結びつける推論での妥当性・合理性の欠如がある。ここで重要なのは、いかに非合理的に思われても、主体にとってはある程度の現実感（体験的距離）をもって知覚されているために表出されるのだということである。このような反応には例えば、図版上の配置や対称性のみを根拠とするようなものや、部分的にすぎない特徴を全体に飛躍させたような反応があり、このような反応は総じて検査者にとっての了解可能性も低いとされる（Exner, 1974; 片口, 1987）。このような非合理的な推論を含む説明には、逸脱言語反応と呼ばれる分類が付され、統合失調などで見られる思考の障害のひとつの指標となる（Kleiger, 1999）。この指標は病理性を示唆するものとして有用であるとされる一方で、ここでいう「思考」ないし推論の範疇が明確ではないために、逸脱言語反応であれば思考障害を指すとされるが、では思考障害とは何かといえ、逸脱言語反応を生ずることだ、というように定義が循環しているという指摘もある（Kleiger, 1999）。

推論の合理性と知覚の了解可能性の問題は、本研究で扱ってきたように、ロ・テストにおける知覚と推論、思考の関係やその概念的基礎づけが困難であるために、まだ十分整理されていないと考える。ロ・テストにおける知覚の公共性は、私的・主観的でありながら多くの他者にも妥当するような、知覚の間主観的性質と関連づけて考えることができるかもしれない。例えば Merleau-Ponty, M. は、前述の集積された知覚的表象であるモンタージュが習慣としての身体の中に根付いており、この習慣としての身体や知覚は自分のものでありながら他者にも同じものが備わっているという意味で匿名的なも

のであるとしている（村上, 2014; 鷺田, 1998）。また Merleau-Ponty, M. は言語も身体を基礎として成り立っているとするが、全く同じものが共有されているのではなく、私たちは個々の行為としての実践ないし発話のうちに少しずつ歪められた形でそれを保持しているとしている（村上, 2014）。この Merleau-Ponty, M. の知覚・身体・言語の捉え方は、共有されるものでありながら同一でなく、個人差を含みこむものとしてロ・テストにおける知覚の個人差や公共性の問題をよく説明していると考ええる。しかしこの知覚の公共性に関しても、今後より精密な概念的・定義的検討が必要であると考えられる。

### 3.4 ロ・テストと知覚の現象的性質

ロ・テストとあいまいさを含む知覚現象との別の大きな違いとして、現象的性質を反映する点がある。現象的性質とは、ロ・テストで言えば何を見たかという反応内容とは別の、反応の質ないし「感じ」の違いである。Rorschach (1921) は、ロ・テストにおいて、反応内容を分析するアプローチ（内容分析）でなく、現象的性質を含め「その人はどのような形式をもつ知覚を行いがちなのか」に関する分析（形式分析）を重視した。内容分析は精神分析的な象徴的解釈と結びつきが強かった一方で、形式分析は、その人が何を見たかでなく、「どのように」見たか、つまりその知覚がどのようなものとして体験されたかを知るためにあるとされている（片口, 1987）。

プロットのどのような性質が反応を引き起こしたかについての分類は、反応決定因と呼ばれる。これは、反応を特徴づける原因であると同時に反応に随伴する現象的性質でもある。方法によるが、大きく色彩、運動、陰影に分かれ、陰影には手触りを意味する材質と奥行きとが含まれる（Exner, 1974; 片口, 1987）。例えば色彩について、「両側に蝶のような形の羽が広がって

いるから蝶」と話す人もいれば、「赤くて蝶の形だから蝶に見えた」と話す人もいて、後者はそこに蝶の形を見出したと同時に「赤い感じ」を知覚していると考えられる。しかし、ロ・テストは被検査者によって取捨選択され、検閲・推敲を受けて発話された言語的反応から検査者が行った分類に基づくために、これは単に被検査者が知覚について話す時の話し方の癖や「言葉のあや」にすぎないのではないか、という疑問が浮かぶ。これに関して、Giromini et al. (2019) は fMRI を用いた研究によって、ロ・テストで運動を伴う人間が見えていると話されるとき、ミラーニューロンが賦活することを示唆した。ロ・テストで人間の運動が主観的に体験されるとき、他者の運動の知覚を処理する脳領域が賦活したとすれば、単に言葉でそう表現されただけでなく確かに「動いて見えた」ことを示しているのだと考えられる。また鈴木 (2016) でも、反応決定因において色彩が強調される人はそうでない人より反応抑制に関連する事象関連電位の成分が弱く、小さいことが見出された。このことから、ロ・テストの分類に反映される知覚の現象的性質は言語表現の違いによるだけでなく、何らかの認知的処理の個人差を反映することが示唆される。

現象的性質の違いを考慮すると、ロ・テストにおいて同じ刺激に全く同じように感じられる同じものが見えることは稀だということになる。前述の平凡反応でさえ、人によって様々な決定因を伴って知覚される。ロ・テストにおける現象的性質は、被検査者のパーソナリティなどを反映する指標として見られてきた他、被検査者の知覚を追体験するという臨床上的有用性が指摘されてきたが、知覚現象一般との連続性や特殊性という観点で整理した知見はないように見受けられる。例えば材質反応のように手触りとともに感じられることは共感覚の文脈で論じられるかもしれないし、奥行きが知覚されること

は知覚における奥行きの根源性を指摘した Merleau-Ponty, M. の主張 (村上, 2014; 鷺田, 1998) と関連づけて論じることができるかもしれない。

#### 4 ロ・テストと知覚に関する 認知神経科学的モデル

以上、ロ・テストをはじめとするあいまいな知覚現象との関連性について論じてきた。上記の問題は知覚プロセスの認知的・神経的モデルとどのように関連するのだろうか。

ロ・テスト反応に関連する脳領域についての知見は蓄積されている最中だが (石橋・齋藤, 2021), 反応生起のプロセスに関して、微視的過程など未だ心理学的に十分検討されてきたとは言い難い。鈴木 (2016) は、ロ・テストの色彩に関する指標と認知課題中の事象関連電位とを比較した研究を通じて、トップダウン・ボトムアップの注意制御の関与を指摘した。Giromini et al. (2017) も、fMRI を用いた研究において、ロ・テストの反応生成にトップダウン・ボトムアップ的処理の両方が関わっていると指摘しており、これは両義知覚 (Pitts et al., 2008) やオブジェクト認知 (新美ら, 2016) で想定されているモデルとも共通性がある。

この点に関して、近年 Friston et al., (2006) によって展開された予測誤差最小化理論は、ボトムアップ的・トップダウン的要素の相互作用について異なる見方をしている。すなわち、知覚による情報の入力とは根本的に不完全なものであるため、観測された事実から原因を推測するベイズ推論が行われているというものである。先行するトップダウン的な内的モデルと、ボトムアップ的に処理された知覚の入力とのずれが最小化するようにモデルが調整されるため、トップダウン的な要素とボトムアップ的な要素は不可分に関連しあっているとされる。Meyer &

Friston (2022) もベイズ推論的モデルとロ・テストとの関連性を指摘しているが、ロ・テストの反応生成過程や関連する神経活動を同定する上で、このような見方は本研究で概観した知覚の本性に関する議論とも整合する有用なものであると考える。

## 5 展望と今後の課題

本研究は、ロ・テストを知覚的現象としてとらえるとともに、類似する現象との共通点や違いを整理し、それらが例示される知覚の哲学などの文脈と関連づけて論じた。その結果、特に以下の点について、今後基礎心理学をはじめ、哲学や認知神経科学など他の分野とも横断的に検討する必要があることが示唆された。

まず、ロ・テストがオブジェクト認知やパレイドリア、両義図形、錯視といったあいまいさを含む他の知覚的現象と比較された際に共通して問題となるのは、知覚が独立したプロセスなのか他の心的機能や状態の影響を受けるのか、推論のような他の心的機能と区分できるのかということであった。この点に関して、心理学の文脈では、感覚入力外界について一意に決定できるような手がかりを与えられないため、知覚は本質的に推論としての性質を帯びており、この性質に由来して外界の情報は歪めて知覚されることから、錯視と知覚一般は明確に区分できないとされる。それに対して、例えば幻覚・錯覚論法のような知覚の哲学の議論では、知覚が事実についての知識の裏付けになりうるか否かという認識論的位置付けが重要であり、そのために外界の状態と正しく対応する「真正な」知覚を典型例として議論がなされていた。ロ・テストは、個人の経験や信念などの心的状態によって知覚が影響を受けることを前提として作られているが、ロ・テストにおける知覚の指す範囲について十分に整理された上で、個人差を反映

する仕組みが探求されているとは言えない。知覚を他の要素が影響しない範囲に限定するのか、Wittgenstein, L. の言うように（古田, 2020）行為の中で裏付けられ確かめられる過程を含みこむのかを議論する上でも、ロ・テストは他の現象のように知覚の性質を示す一つの事例として機能すると考えられる。

次に、ロ・テストがその他のあいまいさを含む知覚現象と大きく違うのは、能動的な探索という行為の中の受動性を反映する点と、知覚がどの程度の現実感を伴っているかという体験的距離の個人差を示す点がある。他にも、知覚の個人差のなかに公共性という軸を導入する点、記述的内容だけでなく現象的な性質を反映する点も特色として指摘できる。しかしこれらの点に関しても、心理学をはじめ、他の領域と横断的に論じ、今後整理していく必要があると考える。

## 引用文献

- Acklin, M. W., & Wu-Holt, P. (1996). Contributions of cognitive science to the Rorschach technique: Cognitive and neuropsychological correlates of the response process. *Journal of Personality Assessment*, 67 (1), 169-178.
- Boring, E. G. (1950). *History of experimental psychology*. Appleton Century Crofts, Inc., New York.
- Exner, J.E. (1974) *The Rorschach : A comprehensive system : Vol 1*. New York : Wiley. (エクスナー, J.E. 高橋 雅春・高橋 依子・田中 富士夫 (監訳) (1991) 現代ロールシャッハ・テスト体系〈上〉. 金剛出版)
- Fish, W. (2010) *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. Routledge: London. (フィッシュ, W. 山田 圭一 (監訳) (2014) 知覚の哲学入門. 勁草書房)
- Fliegende Blätter (1892) Kaninchen und Ente. *Fliegende Blätter*, October 23, Nr. 2465, 147. <https://doi.org/10.11588/diglit.2137#0147>
- Friston, K., Kilner, J., & Harrison, L. (2006). A free

- energy principle for the brain. *Journal of Physiology-Paris*, 100 (1-3), 70-87.
- 古田 徹也 (2020). はじめてのウィトゲンシュタイン NHK 出版
- 源河 亨 (2017). 知覚と判断の境界線—「知覚の哲学」基本と応用—. 慶應義塾大学出版会.
- Giromini, L., Viglione Jr, D. J., Pineda, J. A., Porcelli, P., Hubbard, D., Zennaro, A., & Cauda, F. (2019). Human movement responses to the Rorschach and mirroring activity: An fMRI study. *Assessment*, 26 (1), 56-69.
- Giromini, L., Viglione Jr, D. J., Zennaro, A., & Cauda, F. (2017). Neural activity during production of Rorschach responses: An fMRI study. *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 262, 25-31.
- Gregory, R. L. (1970). *The intelligent eye*. Oxford University Press, Oxford.
- Hansen, T., Olkkonen, M., Walter, S., & Gegenfurtner, K. R. (2006). Memory modulates color appearance. *Nature Neuroscience*, 9 (11), 1367-1368.
- Husserl, E. (1893). *Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins*, *Husserliana Bd. X*, Herausgegeben von Rudoif Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff. (フッサール, E. 立松 弘孝 (訳) (1974). 内的時間意識の現象学 みすず書房)
- Husserl, E. (1913). *Ideen zu Einer Reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie Allgemeine Einführung In die Reine Phänomenologie*, *Husserliana Bd. X*, Herausgegeben von Rudoif Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff. (フッサール, E. 渡辺 二郎 (訳) (1979). イデーン：純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 みすず書房)
- 原田 夏樹 (2018). 認知的侵入可能性と認識的影響. 日本科学哲学会 新進研究者 Research Notes, 1, 2-8.
- 池田 学 (2020). 社会が求める神経心理学. 神経心理学, 36 (1), 10-19.
- 石橋 正浩・齋藤 大輔 (2021). ロールシャッハ法と神経心理学. 小川俊樹 (編著) ロールシャッハ法の最前線 (pp.65-82) 岩崎学術出版社
- 柿崎祐一. (1987). ヘルムホルツの視知覚論をめぐって—知覚の機能と機構についての覚書. 甲南女子大学研究紀要, (24), p29-45.
- 加藤 佑昌. (2019). 臨床心理士指定大学院の心理アセスメントおよび投映法教育のシラバス分析. 専修人間科学論集, 心理学篇, 9, 25-34.
- 片口 安史 (1987). 改訂 新・心理診断法 金子書房
- Käufner, S., Chemero, A. (2015) *Phenomenology: An Introduction*. Cambridge: Polity. (コイファー, S., チェメロ, A. 田中 彰吾・宮原 克典 (訳) (2018) 現象学入門. 勁草書房)
- Kleiger, J. H. (1999). *Disordered Thinking and the Rorschach*. NJ: Analytic Press. (クルーガー, J. H. 馬場禮子 監訳 (2010). 思考活動の障害とロールシャッハ法 創元社)
- 木村 敏 (2012). 新編 分裂病の現象学 筑摩書房
- 北岡 明佳 (2014). 常識を疑う—錯視は存在するのか? 立命館文学, (636), 1163-1156.
- 小原 宏基 (2022). 視知覚機構解明に関する基礎的研究: 垂直-水平錯視を用いて. 博士論文, 帝塚山大学 (未公刊).
- 小西 宏幸 (2021). ロールシャッハ法と神経心理学. 小川 俊樹 (編著) ロールシャッハ法の最前線 (pp. 127-143) 岩崎学術出版社
- Logue, H. (2013). Visual experience of natural kind properties: is there any fact of the matter? *Philosophical Studies*, 162 (1), 1-12.
- 田口 茂 (2015). 受動的経験としての像経験—フッサールから出発して. 小熊 正久・清塚 邦彦 (編著) 画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近 (pp.22-48) 東信堂
- 丹野 義彦 (2000). 実証にもとづく臨床心理学と心理アセスメント - 精神症状のアセスメントの最近の進歩. 認知神経科学, 2 (2), 158-163.
- 松田 隆夫 (1995). 視知覚 培風館
- Meyer, G. J., & Friston, K. J. (2022). The active Bayesian brain and the Rorschach Task. *Rorschachiana*, 43 (2), 128-150.
- Meyer, G. J., Viglione, D. J., Mihura, J. L., Erard, R. E., & Erdberg, P. (2011) *Rorschach Performance Assessment System : Administration, Coding, Interpretation, and Technical Manual*. Toledo : Rorschach Performance Assessment System. (メイヤー, G. J. 他 高橋 依子 (監訳) 高橋 真理子 (訳) (2014) ロールシャッハ・アセスメント・システム. 実施, コーディング, 解釈の手引き. 金剛出版)
- Moore, A. & Gibbons, D. (1995). *Watchmen*. DC Comics. (ムーア, A. & ギボンズ, D. 石川 裕人・秋友 克也・沖 恭一郎・海法 紀光 (訳) (2014). WATCHMEN ウォッチメン 小学館集英社プロダクション)
- 村上 隆夫 (2014). 新装版 人と思想 112 メルロ＝ポンティ 清水書院



- 長滝 祥司 (2008). 感覚・知覚・行動—認識モデルと知覚の理論をめぐる一. 村田 純一 (編) 岩波講座 哲学〈5〉心／脳の哲学 (pp.109-130) 岩波書房
- 中島 義実 (2002). ロールシャッハ・テストの実施法と心理学研究法との関係について. 教育実践研究, (10), 121-128.
- 新美 亮輔・上田 彩子・横澤 一彦 (2016). オブジェクト認知: 統合された表象と理解 (シリーズ統合的認知) 勁草書房
- 西口 光一 (2022). メルロ＝ポンティの言語論のエッセンス 身体性の哲学, オートポイエーシス, 対話原理 福村出版株式会社
- 信原 幸弘 (2017) (編著) 心の哲学: 新時代の心の科学をめぐる哲学の問い (ワードマップ) 新曜社
- 小草泰 (2009). 知覚の志向説と選言説 科学哲学, 42, 29-49.
- Pitts, M. A., Gavin, W. J., & Nerger, J. L. (2008). Early top-down influences on bistable perception revealed by event-related potentials. *Brain and Cognition*, 67 (1), 11-24.
- Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostics*. Hans Huber Verlag, Berne. (ロールシャッハ, H. (鈴木 睦夫 訳) (1998) 新・完訳 精神診断学 (付) 形態解釈実験の活用哲学探究. 金子書房.)
- Rubin, E. (1921). *Visuell wahrgenommene Figuren*. Copenhagen, Denmark: Gyldendal.
- 齋藤 大輔・内海 千種・相澤 直樹・牧田潔・中村 有吾・平石 博敏・石橋 正浩 (2018). 投影法課題における図版の特性と性格傾向を反映した神経基盤. 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第 82 回大会, pp. 2AM-042.
- 鈴木 千晴 (2016). ロールシャッハ・テストの色彩反応と情動制御についての実験的検討: 神経生理学的指標を用いて. 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士論文 (未公開).
- 戸田山 和久 (2014). 哲学入門 筑摩書房
- Vitolo, E., Giromini, L., Viglione, D. J., Cauda, F., & Zennaro, A. (2021). Complexity and cognitive engagement in the Rorschach task: An fMRI study. *Journal of Personality Assessment*, 103 (5), 634-644.
- 鷺田 清一 (1998). メルロ＝ポンティ 可逆性 講談社
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophical Investigations* (Rev. 4th edition, G. E. M. Anscombe, P.M.S. Hacker and J. Schulte, Trans. Wiley-Blackwell. 2009) (ワイトゲンシュタイン, L. 鬼界 彰男 (訳) (2020). 哲学探究 講談社)
- Wood, J. M., Teresa, M., Lilienfeld, S. O., & Garb, H. N. (2003). *What's wrong with the Rorschach? : Science confronts the controversial inkblot test*. San Francisco, CA, US: Jossey-Bass. (ウッド, J. M. 他. 宮崎 謙一 (訳) (2006) ロールシャッハテストはまちがっている—科学からの異議. 北大路書房.)
- 山田 圭一 (2015). アスペクト変換において変化するもの—ワイトゲンシュタインの二つのアスペクトの分析を通じて. 小熊正久・清塚邦彦 (編著) 画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近 (pp.22-48) 東信堂
- Yokoi, K., Nishio, Y., Uchiyama, M., Shimomura, T., Iizuka, O., & Mori, E. (2014). Hallucinators find meaning in noises: pareidolic illusions in dementia with Lewy bodies. *Neuropsychologia*, 56, 245-254.
- 横井 香代子・西尾 慶之・内山 信 (2012). レビー小体型認知症の錯視・幻視: パレイドリア誘発課題を用いた検討 (特集 幻覚・妄想の神経精神医学). 臨床精神医学, 41 (6), 731-738.

(受理日: 2023. 8. 22)

## Review

# Rorschach Test and the Philosophy of Perception

SUZUKI Chiharu

(College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

---

This study organized the similarities and differences between the Rorschach test, which is a psychological test of projective methods for detecting ink blots, and perceptual phenomena involving ambiguity, such as optical illusions, bistable figures, object recognition, and pareidolia, which have been discussed in the philosophy of perception. Furthermore, it discussed the psychological and philosophical contexts related to the debate on the nature of perception.

In this study, the perceptual phenomena presented the issue of the relationship between perception and mental function such as reasoning. Meanwhile, in the philosophy of perception, scholars assumed that genuine perception that correctly corresponds to the external world constitutes a typical situation. Thus, they suggested that ambiguity is fundamental to perception in the context of psychology and the Rorschach test. In addition, the characteristics of the Rorschach test as a perceptual phenomenon were the passivity experienced in active perceptual exploration, public nature of individual differences in perception, and description of phenomenal properties of perceptual experiences. As this study is an exploratory endeavor, each of these issues requires further examination in the future.

**Key Words** : Rorschach test, Philosophy of perception, Inkblot test, Projective method

*RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.48, 63-80, 2024.*

---